平成30年度 セーフコミュニティさかえ

絵画コンクール入賞作品

栄区に住んでいる又は栄区の学校に通う小中学生を対象に、日頃のセーフコミュニティ活動に取り組んでいる地域の人たちへの感謝の気持ちや安全・安心のための取組をテーマとした絵画コンクールを開催しました。

栄区長賞

栄区連合町内会長賞

栄警察署長賞

栄区消防署長賞

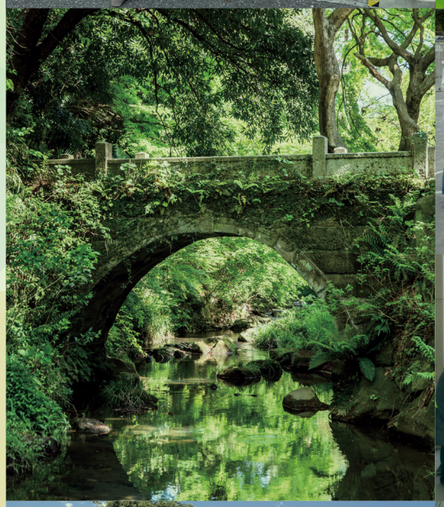
セーフコミュニティ推進機構賞

「セーフコミュニティ
再認証式典」で
表彰式も行ったよ!

栄区セーフコミュニティ 記念誌
［発行］令和５年10月 ［発行者］栄区役所区政推進課
〒247-0005 横浜市栄区桂町303番地19
TEL:045-894-8936 FAX:045-894-9127

あなたと歩んだ、セーフコミュニティ。

安全・安心な栄区をめざして



横浜市栄区役所

横浜市 18 区の中で唯一、国際認証セーフコミュニティを取得した栄区。セーフコミュニティとは「事故やケガの原因についてデータを使って究明し、地域ぐるみで予防に取り組んでいるまち」に与えられる認証です。栄区は国内で 7 番目に認証を取得し、安全・安心なまちづくりを推進してきました。認証満了にあたり、これまでの取組と地域活動の軌跡を振り返ります。

［こどもの安全］通学時の見守り

［スポーツ時の安全］けが予防講習会

［交通安全］自転車マナーアップキャンペーン

［児童虐待予防］赤ちゃん訪問定例会

［高齢者の安全］高齢者の健康づくり

［災害時の安全］学校での防災訓練

［自殺予防］街頭キャンペーン

［防犯］特殊詐欺予防の出前講座

発行にあたって

栄区長　堀口 和美

栄区は、平成 25 年度に国際認証セーフコミュニティを取得し、地域・行政・関係機関が一体となって安全・安心なまちづくりを進めてまいりました。認証の準備期間を含め約13年間にわたり、区民の皆さまに多大なるご協力及びご尽力をいただきましたことに、心より感謝申し上げます。

セーフコミュニティの取組を進めるにあたっては、高齢者安全や児童虐待予防などテーマ別に分科会を設け、地域及び関係機関と意見交換や役割分担をしながら課題に向き合ってきました。地域の皆さまと行政の協働体制が確立できたことは、事業の大きな成果の一つと言えるでしょう。

また PDCA サイクルを活用した“データを重視する取組”を進めた結果、約 90％の区民が「栄区は安全･安心なまちである」と感じていることが分かり、栄区のイメージ向上やブランド確立につながったと実感しています。

令和 5 年 10 月末に認証満了となりますが、セーフコミュニティの取組による成果を引き継ぎ、協働によるまちづくりを推進していく姿勢はこれからも変わりません。「現場主義」をモットーに、いま課題を抱えている現場の声をいち早く拾い、今後も地域の皆さまと共に前へ進めればと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

目次

発行にあたって 1
セーフコミュニティさかえ 2
栄区のセーフコミュニティのあゆみ 4
分野別分科会の主な取組と成果 6
インタビュー・連合町内会長 14
インタビュー・分科会座長 21
メッセージ 29

セーフコミュニティさかえ

国際認証セーフコミュニティとは

日常生活を送る中では、交通事故や犯罪、転倒・転落など、時には命の危機につながるような事故やけがが誰にでも起こりえます。

「セーフコミュニティ」とは、「致命的な事故やけがは、その原因を究明することで予防できる」という考えに基づき、地域ぐるみで予防活動を展開するまちのことを言います。

栄区は、平成25年に日本で7番目に認証を取得し、平成30年には再認証を取得しました。※

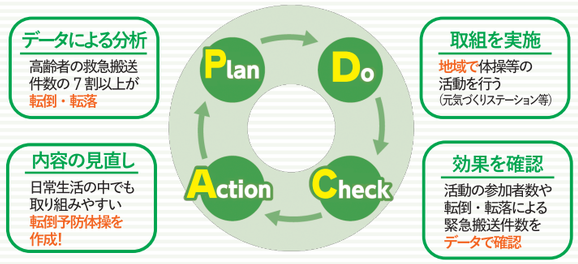
なお、世界では、約400都市がセーフコミュニティの認証を取得しています。

日本では栄区の他に、京都府亀岡市（国内認証）、青森県十和田市、神奈川県厚木市、東京都豊島区、大阪府松原市、福岡県久留米市、埼玉県秩父市、鹿児島県鹿児島市、福島県郡山市、埼玉県さいたま市、山梨県都留市が認証を受けて活動しています。（令和5年10月時点）

※認証を取得するためには国際セーフコミュニティ認証センターが定める指標を満たしていることを書類審査と現地審査で示す必要があります。

取組方法

「セーフコミュニティ」の活動では、PDCAサイクルを使って、取組の効果を確認しながら改善を図っています。



高齢者安全対策分科会の活動例

コラム 取組の背景

○区内の事故やけがの予防

高齢化が急速に進む一方で、児童虐待や自殺等の新たな問題が顕在化しつつあった中、多様でかつ深刻な安全・安心に係る課題に対して、地域と区役所がより一層連携して取り組む必要がありました。

○各施策の総合的・効果的な推進

暮らしの安全・安心につなげていくため、区役所及び関係機関の安全・安心に関する幅広い業務について、地域コミュニティの取組を拡大・充実させながら、横断的に取り組む必要がありました。

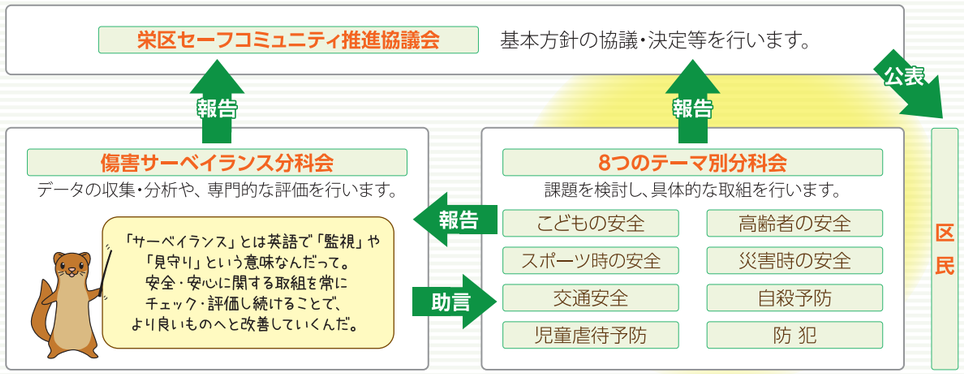
○活力ある地域コミュニティ

自治会・町内会を中心とした地域コミュニティが定着していたため、自治会・町内会を通じた情報発信や地域のニーズの把握が行いやすく、取組推進のための基盤がありました。

（平成23年自治会・町内会加入率84.9%）

取組を進めるための組織

栄区では、8つのテーマごとに設置された分科会により具体的な活動を進めるとともに、傷害サーベイランス分科会によりデータの収集や専門的評価を行っています。



セーフコミュニティの特徴のひとつ！

傷害サーベイランス分科会

セーフコミュニティでは、それぞれの取組を常にチェック・評価をし続けることで、より良いものへ改善していくことが求められています。

栄区の傷害サーベイランス分科会は、学識経験者、警察、消防等から構成され、データの収集・分析や、取組の評価等を行っています。

これまでの助言等

・データ活用について（区民向けアンケート、救急搬送データ）

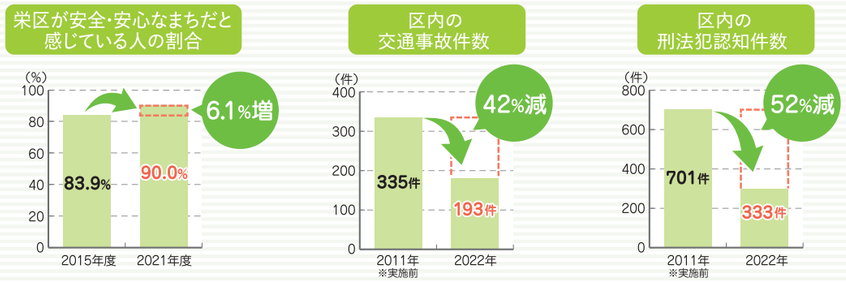
・分科会の取組について（分科会間の取組連携、認知度の向上、取組対象の拡大手法）等

〈学識経験者の所属機関（順不同）〉
横浜市立大学、横浜国立大学大学院、聖徳大学、北海道大学大学院、近畿大学（令和5年度時点）

コラム 取組の成果

○「栄区は安全・安心なまちである」と感じている区民は90.0%※

取組前と比較して交通事故発生件数及び刑法犯認知件数は減少傾向にあります。セーフコミュニティは、安全・安心なまちづくりの機運醸成につながりました。（※）令和3年度区民意識調査



データ元：神奈川県警察統計

栄区のセーフコミュニティのあゆみ

平成22年(2010年)
活動開始宣言

平成25年(2013年)
本審査・認証取得
(日本で7番目の取得)

平成27年(2015年)
防犯対策分科会を
新たに設立

平成29年(2017年)
再認証の現地審査に
向けた事前指導

平成30年(2018年)
現地審査・再認証取得

令和5年(2023年)
認証期間満了(10月)

初めての認証

本審査(平成25年1月13~15日)

審査の様子(講評、防災訓練視察)

歓迎交流会

認証式典(平成25年10月5日)

海外審査員による記念講演

けが予防を通した安全なまちづくりを継続的に実施することについて合意しました

セーフコミュニティ推進協議会委員の皆様

再認証

現地審査(平成30年6月15~17日)

審査員による区内視察(本郷ふじやま公園)

審査の様子(分科会によるプレゼンテーション)

再認証式典(平成30年10月6日)

けが予防を通した安全なまちづくりを継続的に実施することについて改めて合意しました

セーフコミュニティ推進協議会委員の皆様

分科会委員の皆様への感謝状贈呈

認証の盾及び合意書

平成25年認証時

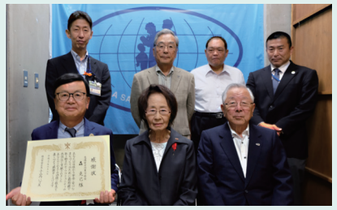
認証都市のあかし!

平成30年再認証時

分科会の皆さま(平成30年再認証当時)

こどもの安全

スポーツ時の安全



交通安全

児童虐待予防

高齢者の安全

災害時の安全

自殺予防

防犯

こどもの安全

課題と取組

課題		取組
1 課題 《乳幼児》	0～4歳の救急搬送件数が多い 養育者のヒヤリハット経験が多い	1 取組 養育者への啓発
2 課題 《小学生》	小学校内での事故は、大人の目が行き届かない「休憩時間」に発生することが多い	2 取組 子どもたちの危機管理能力の向上（KYTの実施）
3 課題 《小中学生》	「怖い人と出会う」のは家や学校の周辺である	3 取組 地域の住民による見守り

ポイント　ＫＹＴ（危険予知トレーニング）

ＫＹＴとは、環境や状況の中に潜む危険性などの要因を発見し、解決する能力を高める手法です。
当分科会では、栄区ならではの場所やタッチーくんなどをイラストにしたオリジナル教材を作成し、子どもたち自身が考える「ＫＹＴ」を推進しています。

栄区オリジナルKYT教材

放課後キッズクラブでのKYT

成果

養育者への啓発

事故予防の対策を行っている人の割合

	2015 年度	2022 年度
4 か月児	65.7%	81.3%
1 歳 6 か月児	75.5%	92.3%

データ元：栄区役所

子どもたちの危機管理能力の向上（KYTの実施）

	2013年度	2022 年度
実施回数	2 回	29 回
参加児童数	170 人	903 人

データ元：栄区役所

地域の住民による見守り

安全安心な地域であると感じている割合

	2016 年度	2022 年度
小学 5 年生	85.4%	88.2%
中学 2 年生	65.5%	80.1%

データ元：栄区学校アンケート

小学校の「休憩時間」に発生した負傷件数

2013 年度	2021 年度
127 件	52 件

データ元：小中学校災害共済給付データ

スポーツ時の安全

課題と取組

課題	対象	取組
1 課題 スポーツ活動時の準備運動不足、技術不足	全年代	1 取組 けが予防講習会の開催
2 課題 日頃の運動不足	20代～70代以上	2 取組 ウォーキングの推進

ウォーキング講座

ポイント　大学との連携

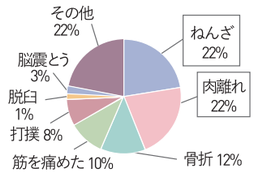
令和元年度から、慶応義塾大学スポーツ医学研究センターと連携し、スポーツ時の事故・けが予防の取組を進めています。
栄区内におけるスポーツ活動時の事故・けがについてのアンケート分析を行ったほか、分析内容の共有会も実施しました。
また、栄区内で多く発生した肉離れやねんざの対策動画などけが予防に関する動画を作成しました。

アンケート分析内容共有会

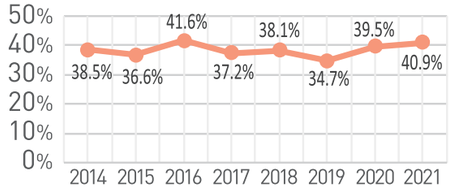
成果

スポーツ活動時に発生した事故・けがに関するアンケート

過去5年間のうちに発生したスポーツ活動中のけがの種類「スポーツ活動時に発生した事故・けがに関するアンケート」（2017 年度実施）



週１回以上ウォーキングをしている人の割合



※約 40%の人が継続してウォーキングをしていることを、成果だと考えています。
データ元：区民意識調査、セーフコミュニティアンケート等

啓発講習会の実施と動画配信

テニスやサッカーなど各競技団体の活動場所へ伺い、競技ごとに適した準備運動・ストレッチを交えた講習会を実施しました。
また、アンケートの結果、けがが多く発生していたねんざや肉離れをテーマに設定し、動画を作成しました。

けが予防講習会

よこはまウォーキングポイント事業の登録者数（累積）

2013 年度	2021 年度
3979 人	15,711人

※歩数計とアプリの登録者数
データ元：栄区役所、「よこはまウォーキングポイント」利用状況報告書

交通安全

課題と取組

1 課題
子どもの交通事故
自転車の事故件数が約4割を占め、登下校時に事故に遭う割合が比較的高い※

- 自転車事故への対策 → **1 取組** 自転車ヘルメット着用啓発
- 登下校時の事故への対策 → **2 取組** スクールゾーン対策

スクールゾーン対策協議会

2 課題
高齢者の交通事故
自動車乗車時が7割と最も多い※

- 自動車事故等への対策 → **3 取組** 高齢者交通安全教室

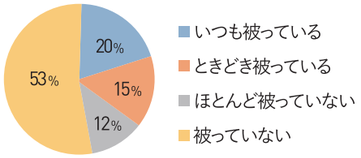
高齢者交通安全教室

※データ元：2011～2016年　栄警察署

ポイント　自転車ヘルメット着用啓発

令和２年度にアンケートを実施した結果、栄区には「自転車に乗る時にヘルメットを被っていない小学生」が半数以上いることがわかりました。子どもの自転車に関する事故では、約半数が頭部とその付近にけがを負っていることから、ヘルメットの着用がけが予防には効果的です。
なお、小学生以下の子どもにヘルメットを着用させることは、保護者の努力義務となっています。

自転車に乗る時、ヘルメットを被っていますか。



成果

子どもの自転車ヘルメット着用率

	2014年度	2020年度
未就学児	37.5%	75.3%
小学生	12.5%	19.7%

データ元：未就学児は市立保育園の保護者へのアンケート、小学生は学校アンケート

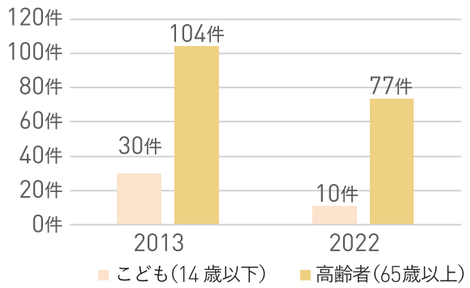
高齢者による免許返納件数

2013年度	2022年度
258件	539件

データ元：栄警察署

栄区の交通事故発生件数（子ども・高齢者）

子どもの事故は約67%減、高齢者の事故は約26%減



データ元：栄警察署

児童虐待予防

課題と取組

1 課題
子育てに自信を持てず、不安を抱える母親が多くいる

- 地域への虐待防止啓発 → **1 取組** さかえっ子の笑顔ひろげ隊
- 親への情報提供 → **2 取組** こんにちは赤ちゃん訪問

2 課題
児童虐待に至るリスクを抱えている養育者が存在している

- 関係機関の連携強化 → **3 取組** 栄区虐待防止連絡会
- 親への専門的支援 → **4 取組** 専門家による早期対応

ポイント　さかえっ子の笑顔ひろげ隊

横浜市で行った調査によると、自分の子どもが生まれる前に赤ちゃんの世話をした経験がない人は７割以上にのぼることがわかりました。
そこで、当分科会では「さかえっ子の笑顔ひろげ隊」として、小中学生を対象とした「乳幼児ふれあい体験」を行っています。また、養育者への情報提供等も行い、子育て世帯を温かく見守る地域づくりを目指しています。

乳幼児ふれあい体験

成果

身近な地域に出向いての見守りの啓発人数

さかえっ子の笑顔ひろげ隊の紹介、児童虐待防止啓発リーフレット、オレンジリボン配布等、地域の方に向けた啓発活動を行っています。

2013年度	2019年度
850人	1,155人

データ元：栄区役所

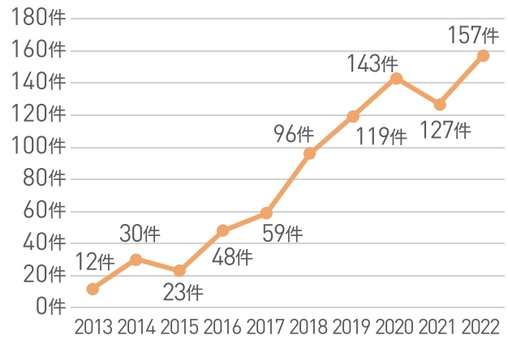
※2020年度以降はコロナ禍により十分な啓発活動ができなかったため、2019年度のデータを使用しています。

栄区虐待防止連絡会

平成27年度から地区別虐待防止連絡会を開催。より身近な地域で関係機関が顔の見える関係づくりを行い、虐待防止に理解を深め、地域での見守り・子育て支援などに連携して取り組んでいます。

児童虐待対応件数（児童虐待の顕在化）

児童虐待対応件数は増加傾向



※発見に至らなかったケースが、取組によって顕在化したことが成果だと考えています。

データ元：栄区役所

高齢者の安全

課題と取組

1 課題
高齢者の転倒・転落事故が多い

1 取組
転倒予防対策の普及
栄区転倒予防体操を作成し、
動画配信、出前講座等を実施

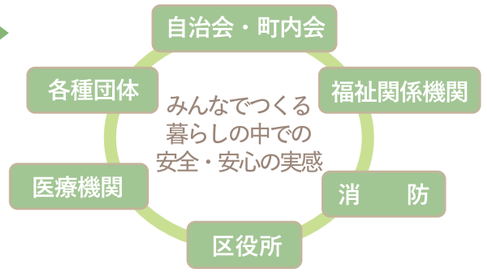
ヒートショック対策啓発グッズ

2 課題
高齢者の冬場の
溺死・溺水事故が多い

2 取組
ヒートショック対策の普及
毎年、強化月間（11～2月）を設定し、
ポスター掲示、出前講座等を実施

ポイント
関係団体と連携した啓発活動の実施

当分科会では、高齢者の安全対策を進めるため、「転倒予防」及び「ヒートショック対策」に関する啓発活動を進めています。
啓発活動の実施にあたっては、分科会メンバーを中心に、関係団体の方と連携することで、多くの皆様と協力し、進めることができました。



成果

転倒予防対策の啓発活動

「栄区転倒予防体操」を作成し、ちらし配布、地域での出前講座を実施して、区民の皆さんに周知しました。

	2016 年度	2022 年度
転倒予防体操に取り組んだ人数（延べ）	1,524 人 →	83,950人

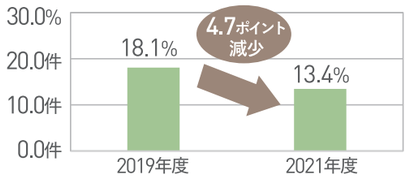
データ元：栄区役所

ヒートショック対策の啓発活動

	2014 年度	2022 年度
リーフレット配布数（延べ）	8,000 人	34,173人

データ元：栄区役所

「ヒートショック」の対策を特にしていないと回答した区民の割合（70 歳以上）



データ元：栄区民意識調査

災害時の安全

課題と取組

1 課題
地域防災拠点の課題
①学校との連携
②実践的な訓練が必要

1 取組
実践的な防災拠点訓練の実施

区割り訓練

2 課題
災害時要援護者支援の必要性
（全ての自治会・町内会が取組に着手できているわけではない）

2 取組
災害時要援護者支援の取組拡大

災害時要援護者支援の取組
（車いすによる搬送訓練の様子）

3 課題
自助の取組の促進

3 取組
家具転倒防止対策助成事業の
チラシ配布、栄区防災ノートの配布

ポイント
地域防災拠点の開設・運営に焦点を当てた訓練の実施

災害安全対策分科会では、地域防災拠点での訓練について、開設・運営に焦点を当てた「拠点運営訓練」へのシフトを推進。各地域防災拠点と意見交換を行いながら、様々な訓練を実施しています。

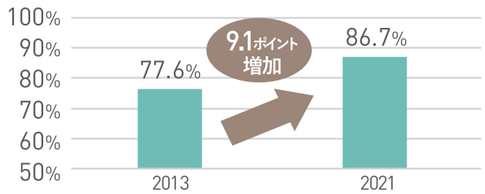
災害時用トイレ組み立て訓練

夜間避難者受付訓練

感染症対策避難者受付訓練

成果

地域防災拠点の場所を知っている区民の割合



データ元：栄区民アンケート、栄区民意識調査

災害時要援護者への避難支援の取組に着手している自治会・町内会の割合

2013 年度と比較して、より多くの自治会・町内会で取組が広がっています。

2013 年度	2021 年度
84% →	95%

データ元：栄区役所

栄防災ノート

災害時に必要な備蓄や避難行動、避難先、情報の収集方法などについて、各世帯でチェックと書き込みができる「栄防災ノート」を高齢者安全対策分科会と連携して制作しました。

栄防災ノート

発災時にも携帯しやすいA5サイズです。栄区役所本館の 41 番窓口（総務課）で配布しています。

自殺予防

課題と取組

1 課題
自殺問題への理解と自殺予防の必要性を啓発

1 取組
啓発活動の展開
図書館でのパネル展示や本郷台駅・大船駅・港南台駅前等でキャンペーンを継続して実施

大船駅での啓発

2 課題
身近な人の変化に気づく自殺予防の担い手育成

2 取組
ハートフルサポーター養成
サポーターが研修受講後、自殺予防キャンペーンなどに参加

3 課題
自殺のリスク者への介入・支援強化

3 取組
リスク者への支援強化
行政・医療・福祉関係者等によるネットワークの構築等

ポイント ハートフルサポーター（ゲートキーパー）の養成

横浜市では 1 年間に 490 人の方が自殺により亡くなられていますが（平成 31 年人口動態統計）、自殺に至る背景には、健康、生活・経済、家庭問題等の様々な要因があるとされています。
当分科会では、自殺のリスクが高まる要因を理解し、リスクを抱えた方のサインに気づくなど、必要な支援につなげる「ハートフルサポーター（ゲートキーパー）」の養成等に取り組んでいます。

ハートフルサポーター養成講座

成果

自殺予防対策に関心がある人の割合

2013 年度と比較して、2020 年度は **10ポイント**以上増加しました。

2013 年度	2020 年度
40.4%	50.7%

データ元：2013 年度栄区民アンケート、2020 年度 SC アンケート

さかえ・ハートフルサポーターの延べ人数

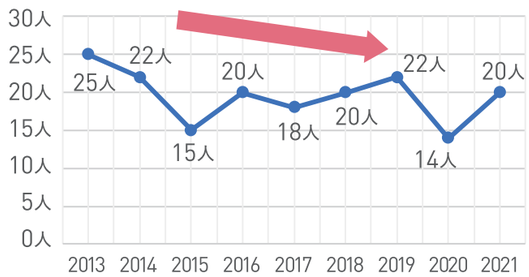
2013 年度と比較して **2 倍**以上に増加しました。

2013 年度	2021 年度
640 人	1,514人

データ元：栄区役所

栄区の自殺者数

区内の自殺者数はゆるやかな減少傾向



データ元：横浜市統計情報ポータル（人口動態）

防　犯

課題と取組

課題
特殊詐欺(※)が増加している

取組
特殊詐欺の被害者層への啓発実施

※親族や公共機関の職員等を名乗って被害者を信じ込ませ、お金をだまし取る犯罪（例：オレオレ詐欺、架空請求詐欺、還付金等詐欺等）

ATM での啓発活動

防犯パトロール

ポイント 特殊詐欺被害者層への啓発

栄区では、令和 3 年の 1 年間で 44 件・約 5,769 万円の特殊詐欺被害が発生しました。
分科会では、特に被害に遭いやすい傾向がある高齢者の方を中心に、出前講座の開催や、金融機関での注意喚起等を行っています。
他に栄警察署と連携し、登録者を対象に防犯情報メールを配信し犯罪発生状況と対応策を周知しています。

出前講座

成果

防犯に関するネットワークの構築

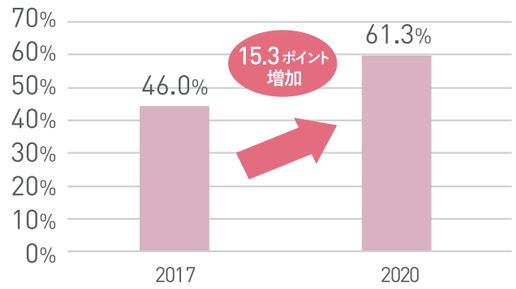
防犯分科会を構成する区内各種団体（栄防犯協会、栄区商店街連合会、栄防犯指導員連絡協議会、栄区保護司会、栄区シニアクラブ連合会、栄区消費生活推進員の会）、栄警察署、栄区役所が連携し、栄区における防犯対策強化、区民の防犯意識を高める取組を進めました。

防犯情報メール登録者数

取組の結果、約 10 年間で **1.4 倍**に増加しました。

2013年 4 月 1 日現在	2023年 8 月 1 日現在
936人	1,319人

特殊詐欺の予防対策※をしている人の割合



データ元：特殊詐欺に関するアンケート

※留守番電話設定、家族の合言葉、受話器周辺に啓発物、栄区役所からの防犯情報メールに登録等

回り道して故郷を見つけた

「なぜ今日みたいな日に、避難所が立ち上がらないんだ」。平成23年3月11日、震災直後の飯島町でそう憤っていた。余震が続く中、親戚を心配して何キロも歩いてきた高齢者もいた。避難所を開こうにも、自らに権限がないのが歯がゆかった。

“わが家は安全です”と書かれた黄色い手拭いを飯島町内会の各世帯に配布したのは、震災後、町内会長に就任してからである。震災時に安否確認がなされなかった経験から“災害時初期行動マニュアル制作プロジェクト”で考案したもので、「無事」の目印として門扉に手拭いを掲げてもらうようにしたのだ。「配布の際、避難時支援が必要かも聞き、支援体制を構築できたのはよかった」。そうした日々の防災活動が実るのは令和元年の台風19号はじめ数々の災害時。「自らの判断で開けるぞ」と避難所を立ち上げると、次々と人々が集まり、地域活動の原点は防災であると改めて実感したのだった。

平時は、小学校の登校時間に旗振りも行う。「母親の自転車に乗せられた園児が、毎朝、おはようと言ってくれた。機嫌の悪い時は知らんぷりだが、小学校に上がる時に“おじちゃん、ありがとう”とくれた手紙は宝物」。小さなエールを胸に、防犯から消防応援協定締結まで、草の根レベルでの安心・安全なまちづくりに取り組む日々である。

異色の経歴の持ち主。製薬会社の研究所に勤めたが、動物実験が割り切れず退職。以降、陸上自衛隊入隊を経て勤務した洋菓子メーカーでは、日本でも定着し始めていたバレンタインデーの視察のため渡仏した。放浪したモロッコでは、子どもが手品で稼ぐ姿に衝撃を受けた。そして早期退職後は地元で郵便配達員などを経験し、現在、伯父の後を継いだ植木職人と連合町内会長を両立する。一本道ではないものの、豊富な人生経験は、多様な人々の暮らしを理解する武器となるだろう。「地域活動を始めて、飯島は故郷だという意識が芽生えた」。世界や様々な業界を旅した末に、自らの居場所に辿り着いた。

「自らの判断で避難所を開けるぞ」

Story 1

横川 惠さん

豊田連合町内会自治会会長
防犯対策分科会座長

住民のニーズが活動の源泉

「行政は“お上（かみ）”ではない！」。そう自らを鼓舞し、行動を起こしたのは平成22年、約1,500 世帯が暮らす大船駅至近のマンション「ガーデンアソシエ」の自治会長になった時のことだ。頭を悩ませたのは維持コストのかさむ機械式駐車場問題。住民の高齢化と駅近立地で利用率が70％に下がる中、赤字に陥っていたのである。この駐車場は平成16年の団地竣工時、市の環境条例によって全世帯分の確保が義務付けられたもので許可なく壊せない。「ならば陳情に行こう」と、関連理事と共に横浜市役所に窮状を訴えたのが、最初の自治活動だった。規制を理由に断られながらも粘り強く交渉を続け、半減の許可が下りたのは2週間後。陳情が行政を動かし、改正環境条例が例外的に適用された瞬間だった。「以降、維持費はグンと下がったよ」。

平成25年、マンション入居以来開業していたクリニックが撤退し、医療機関の空白が生まれた時にも一肌脱いだ。「居住者の中にお医者さんがいるはずだ」と募集をかけると数名の医師から応募があり、区内の医療機関に勤務する内科医の開業を取り付けた。他にも「電球を取り替えられない」といった高齢者の声を知るや、1回100円で頼まれごとをする“お助け隊”を結成し、連合会長就任後は、バイクの突っ切りが問題となっていた「ぐるぐる橋（笠間跨線橋）」袂の通学路の安全確保を警察などに働きかけ、自転車のみが無料駐車場に入れる柵の設置に漕ぎつける。「ルールだから。仕方ないから」と諦めず、行動に移すのが指田流だ。

現役時代は日立製作所の営業マン。国内営業だが、「海外メーカーの製品を日本で売ろう」と海外に契約交渉に行くなど、異端児の片鱗を見せた。今も覚えているのは“絶対、断るな”と“説得力を持て”という上司の言葉。「頼み事は誠心誠意、引き受けなきゃいけないし、論理的に話さないと“なるほど”と耳を貸してくれないからね」。今後も、住民のニーズを源泉に、誰もが無理だと諦めている現状を変えていく。

「頼まれ事は、誠心誠意引き受けなきゃ」

Story 2

指田 弘さん

笠間連合
町内会自治会会長

Story 3

田中 健次さん

小菅ケ谷連合
町内会自治会会長

「資料の回覧じゃダメ。心で伝えるべき」

誰より本郷を知るからこそ

まさに本郷の生き字引である。「こないだ、栄区は人口がうなぎ上りで増えましたよね。本郷（ウチ）の方もご多聞に漏れず家屋が次々と建ちました」と振り返るので、聞くと昭和40～50年代の大規模開発のことだった。昭和48年に京浜東北・根岸線が磯子から大船まで延びた日のことも昨日のことのように覚えている。こうした高度成長期の企業戦士時代から土日を利用して関わり始めた地域活動は、通算30年以上に及ぶ。

現在、セーフコミュニティの活動で特に力を入れているのが特殊詐欺対策。「栄警察署から区役所を名乗る還付金詐欺の被害が増加しているとの報告があった。改めて注意喚起が必要だと感じたね」。そこで金融機関の窓口に防犯指導員を配置する他、青色回転灯が付いたパトロール車、通称「青パト」で地区を巡回し、「特殊詐欺に注意して」と警鐘を鳴らしている。情報提供に際して重視するのは口（くち）コミ。「資料を回覧したから理解してくれたというのは大間違い。心で伝えなければ」と、栄区民まつりに防犯関連ブースを設けるなど懸命に発信する日々だ。

嬉しかったのは、地域の小学５年生の女の子がセーフコミュニティについて理解していたこと。「栄区は横浜市で唯一セーフコミュニティの認証を取得した区。防犯や災害安全、高齢者安全に尽力してきたことが認められたようで誇らしかったよ」。一方で区民の大きなうねりにできなかったという反省点もある。築き上げてきた経験をどう区民の実践に繋げるかが今後の課題だ。

今はコロナ禍で減ったものの、定例会後は飲みニケーションが田中流。「駅前の飲食店で会長を見かけた」との区の職員の言葉に、「いやいや参った」と頭を掻く。「現場には役員も連れていき、雰囲気を感じてもらう。酒が入れば本音も聞けるしね」。そんな情報交換から「若者に出会いの機会を作る企画」も生まれている。本郷の生き字引は、常に新語をインストールしながら、地域の発展に貢献し続ける。

Story 4

細田 利明さん

本郷中央連合
町内会自治会会長

「朝晩、電気点けっぱなしは赤信号」

バスケと同じチームワークで

市バスに乗っていたある日、50歳代の女性に「総監！総監！私、私」と呼びかけられた。見覚えのない顔である。聞けば、地域のミニバスケチームの40年前の教え子だった。また別の日には飲み屋のレジで「卒業生です」と頭を下げられたこともある。本人も記憶し切れない程の人脈こそ、約40年、地域活動に邁進してきた証であろう。「どこで見られているか分からないから、悪さはできないね（笑）」。

地域活動との出会いは42歳の時。自治会運動会の徒競走で断トツ１位となった快足が、当時の自治会長の目に留まった。そこから子ども達を指導する文化体育部に抜擢され、餅つき大会、そうめん流し、運動会などを行う裏方となった。余勢を駆ってミニバスケチームを結成するとすぐに50人が集まり、現在まで続くバスケ指導も始まるのである。「練習の合間、朝食を食べていない子に理由を問うと、親が共働きと分かり、家庭を通し地域の息遣いまで感じるようになった」。やがてその眼差しは、重症心身障害児者の通所施設「朋」との縁で福祉の世界にも向けられる。「発声さえ難しい彼らとの意思疎通に悩んだが、担当職員は目を見て意を汲む。教えられた通りにやると、その子はニコッと笑うんだよ」。以降は福祉も学び、施設の成人式での餅つきも続ける。

信条は「地域活動とバスケは同じ」。花形だけでなく、控えの選手も連携することでどんな企画も動き出すと言う。例えば「交通事故大根絶」にかけて、交差点で運転手さんに大根を配ったのは、皆のアイデアの結晶だ。現在、注力するのは孤独死問題。「朝晩電気点けっぱなし、布団干しっぱなしは赤信号」と警鐘を鳴らし、高齢者の交流を促す企画や見回りを行う日々である。

80歳を超えても頑張るのは、野村前連長の背中を見てきたから。病と闘いながら自らの働きぶりを見せ、死の１カ月前に「細（ほそ）、頼む」と言った。その渾身のパスを受けた以上、やる他あるまい。

Story 5

豊田　孝有さん

本郷第三連合
町内会会長

「必要な時に使えない資金はおかしい」

行動してこそ意味がある

大手電機メーカーを定年退職し、ケアプラザの送迎ドライバーとして働き始めた時、ふと気が付いた。「元大橋に 50 年以上住んでいるのに、近所以外は住民の顔さえ知らない」。デイサービスなどに通う高齢者やその家族と触れ合う中で、共に生きる人々との顔合わせが重要だと感じたのだ。町内会活動の誘いがあったのはそんな折である。「ウチで暇してる人がいるよ」という妻の言葉はやや心外だったが、何かの縁と引き受けたのだった。

2年後には役員になり、元大橋の歴史を調べていた時に知ったのが、町内会発足50周年が迫っていることだった。「よし、皆と 50 周年を祝おう」。だがこの時、立ちはだかったのが規約の壁。式典開催には無論予算が必要だが、町内会の資金は自治会館建設用に積み立てたもので使えないのだ。そこで「(会館建設の見通しが立たない中) 災害や式典など必要な時に使えないのはおかしい」と立ち上がるのである。2年がかりで規約改定に漕ぎつけ、令和4年に開催した式典では予算で全世帯に蜂蜜と記念誌を配ることができた。言わば仕組みを変えた瞬間だった。自治会館の今後についても腹案がある。「社会問題化している空き家をリースで活用したい。ただリースには補助が出ないので、補助の仕組み改善を提案するつもり」。

地域について真摯に学び、規約が障害なら変える。そんな姿勢は40年務めた会社員時代に身に付けたものだ。「“和・誠・開拓者精神”が社是だった。一番影響を受けたんじゃないかな」。その精神のもと、新たに挑むのは充(あ)て職問題。「どの団体も同じ顔触れでは新たな意見は出ず、(充て職による) 多忙で会議を休むようでは意味がない」。会議前には分厚い資料を隅々まで読み込んで質問を考える責任感から出る言葉だ。地元の七曲(ななまがり)の旧道がかつて“いざ鎌倉”と武士が馳せ参じた道であることは、記念誌制作時に知った。規約や慣例に縛られ地域が停滞する今こそ、行動を起こす時だと思っている。

Story 6

三原　一郎さん

上郷西連合
町会会長

「会費をもらう以上、付加価値を出す」

心のV字回復を目指して

「わかった。自分の道を行け」。半世紀前、家業を継がない旨を伝えた時の父の姿は今も覚えている。船舶修理会社を営む父に「私のことは諦めてほしい」と懇願し挑んだのは、電機メーカーのソニーだった。「英語で喧嘩できる人求む」という求人に奮い立って中途で飛び込み、欧州では延べ 11年、営業に飛び回った。赤字の国内グループ会社を「5つの気 (正気・気概・勇気・根気・運気)」でV字回復させた手腕も、メディアで取り上げられている。その活躍を誰よりも喜んだのは、他ならぬ父だった。

72 歳までビジネス現場で奔走し、ふと地元・尾月に目を転じると、地域活動に黄信号が点滅していた。慢性的な担い手不足の上、1 年の会長任期では腰を据えて取り組めず、役員会の内容も住民に伝わっていない。「これではいけない。会費をもらう以上、付加価値を出さなければ」。そこで会長就任後、まずは「班長会だより」を通じて特殊詐欺被害や防災訓練など身近な情報を発信し、自治に関心を持ってもらうことから始めた。借地だった自治会館も、地主に直談判して売買に漕ぎつけ“自前化”を実現。中でも最大の試みは、住民の“気”の改革だろう。若手中心に行事を企画する「盛り上げ隊」や、班長の任期終了後も活動を手伝える「みんなで支援隊」を結成し、活躍の場を提供したのである。そんなある日、高齢の女性が防犯パトロールを続けるうちに元気になり、「この歳でも人の役に立てるのが嬉しい」と語った笑顔が忘れられない。地域に「活気」が戻り始めたと感じた瞬間だった。

あの日、背中を押してくれた父はもういないが、「自分の道を行け」という言葉は胸にある。その人生の道の指針となっているのが、ソニーの創業者盛田昭夫氏の姿だ。「お客様をお送りする際、雨の中、傘もささずにお辞儀し、姿勢ひとつで“顧客第一”を示していた」。5 年間の会長職を経て連長という道を歩き出した今、自らの姿で何を伝えられるかを考えている。

Story 7

「人とのつながりが安全や防災に活きる」

芦川 弘さん

上郷東連合
町会会長

地域活動は大人の社会科

社会科の教員として定年まで教えてきた。授業で地域のことを学んだ子ども達が卒業後に地域とどう関わっているか知りたいと、“大人の社会科”のつもりで民生委員活動や町内会自治会などに参加した。しかし直面したのは、教室での学びを社会に反映しづらいという現実だった。集合住宅のみならず、一戸建てでも向こう三軒両隣の交流がない。公共施設から聞こえるクラブ活動の練習の音に苦情が出て、責任者と共に謝りに行ったこともある。「この街をどうしたらいいのかという考え方が、どっかに行っちゃっているんだね」。自ら実行委員長となって地域交流を推進する「庄戸の元気づくり」活動をスタートしたのは平成 19 年のことである。

空き家を利用して、子育て支援サロン「すくすく」や、多世代交流サロン「花水木」を開設すると、引きこもりがちだった高齢者達や、交流の場を求めていた親子が集い始めた。ここを拠点に健康づくり講座や健康体操の会など自主的な交流が生まれ、「様々な世代の方と知り合えた」という声が上がるのだ。また庄戸小・庄戸中学校で朝の挨拶運動を始めたところ、街角にも変化が起こる。「おはようございます！」。子ども達の元気な声に、高齢者が微笑んで応じる。今までになかった光景だった。「こうした人と人とのつながりの全てが、安全や防災に活きてくるんです」。セーフコミュニティの自殺予防対策分科会に参加した経験も、地域活動の貴重な糧だ。

定年退職直後に妻を亡くした。「地域活動は、女房孝行できなかった償いでもある」。現在、高齢者が住む上郷東エリアでの移動販売に携わるのも、「僕みたいに一人暮らしの男は、ちょっとした弁当があればいい」と考えたから。他にも移動図書館や、次世代の地域活動を担う「若手の会」の育成にも注力し、若い人の意見からも真摯に学びたいと考える。生きた社会科を実践する姿を、天国の妻はどんな風に見つめているだろう。

「映画もお祭りも、栄区に戻るきっかけに」

Story 8

片岡 喜久江さん

こども安全対策分科会座長

ご褒美は、子ども達の笑顔

「Trick or Treat ！」。仮装した 100 人以上の子ども達が元大橋地区の 7 所帯のシニア宅前で叫ぶと、高齢者達が満面の笑みで出迎えてお菓子を配る。コロナ禍のため 3 年ぶりとなった子ども会主催のハロウィーンイベントの光景を見ながら、「やってよかった」と心から思っていた。子どもにとっては貴重な世代間交流の場となり、高齢者にとっては「来年もお菓子をあげなくちゃ」と生きがいになったからだ。「他の町内会との交流会でもノウハウを聞かれた。このイベントを機に世代間交流の輪が広がればいい」。

父が園主を務めた幼稚園に勤務していたこともあり、子ども達との付き合いは長い。小中高と PTA 活動に従事し、子どもが卒業すると地域活動に足を踏み入れた。以降、警察署と共に子どもの事故防止に尽力する他、KYT（危険予知トレーニング）講習会では、一見安全そうな町や学校が描かれたイラストを用い、「どこが危ないかな？」と親子で間違い探しを通じて危険を考える機会を設ける。「曲がり角や、カーブミラーに映った車など“潜む危険”を予知し、回避する力を養ってほしい」。

イベント企画でも「子どもは楽しくないと関心を持ってくれない」と、毎回真剣勝負。体験学習、書道展、映画上映会…。いたち川まつりでは、子どもが買いやすい値段の駄菓子屋も出店した。「50 円硬貨を握りしめて買いに来る子を見ると値上げできなくてね」。何より自身も地域活動を楽しんでいるのがいい。「親子で観た映画も、お祭りも、きっとまた栄区に戻って来るきっかけになる。そんな街を創りたいのよ」。

常に胸にあるのは、“地域に尽くしなさい”という父の教え。そうした思いも受け、セーフコミュニティのこども安全対策分科会座長も務めるが、「そもそも、全ての地域活動は本来セーフコミュニティ活動」と考える。そして幼稚園運営にあたって住民への配慮を欠かさなかったあの日の父にこう伝えたい。「子ども達の賑やかな声は今、世代間交流の希望ですよ」。

「手話ができたら
もっと分かり合えた」

Story 9

白川 正信さん

スポーツ安全対策分科会座長

スポーツと福祉を近づけたい

その子の後姿を校門で見送った瞬間、共に歩いた日々が一気に蘇った。ガイドボランティアとして、知的障害のある児童を小学6年間、学校に送り続けた最後の日のことである。「1年生の頃は通学路にある家々の門扉を開けたりして一向に学校に着かなかった。8時半に校門が閉まるから抱っこして連れて行ったこともあったよ」。高学年になると会話しながら登校できるようになった。卒業式には出なかった分、「最後に二人で」と校門前で撮った写真は宝物だ。「背格好も体重も変わらなかったけれど確かに成長していた。本当に嬉しい6年間だった」。

71歳には見えない若さの源は、中学時代から続けるソフトテニスだ。実業団チームの監督を15年務め、ねんりんピックの代表選手にもなった。その実力を買われて栄区スポーツ協会会長や、セーフコミュニティのスポーツ安全対策分科会座長も歴任し、ウォーキングイベントや AED の普及活動などを行っている。「栄区は高齢化率が市で一番高いが、要介護認定率は比較的低い。ウォーキング推進の効果だと思う」。現在の目標は「スポーツと福祉を近づけること」。そんな思いから、年齢や障害に関係なく楽しめる「ボッチャ」の普及にも尽力してきた。すると瞬く間に栄区の人々の間でブームとなり、今は審判員の育成も始めているところだ。

福祉と出会ったきっかけは、会社員時代の同僚が聴覚障害者だったこと。「手話ができたらもっと分かり合えたはず」と、北海道単身赴任を機に手話サークルで7年学んだ。「何事も並行してやるのが好き」で、赴任先では蕎麦打ちやスキーにも挑戦し、その経験が定年後の栄区での蕎麦打ち教室や傾聴ボランティアなどに活きている。今年の正月には YouTube で獅子舞も学び、高齢者施設で披露した。「妻にはそこまでやる？と呆れられたけど、ありがとうの言葉だけで十分」。スポーツと福祉、両方を結んだ先に、いつか冒頭の児童との再会もあると信じている。

「目一杯、やりましたよ」

Story 10

森 克已さん

交通安全対策分科会座長

交通安全活動と、神主と

今も思い出す光景がある。東京・某神社の広い境内。掃いても、掃いても落ち葉が石畳を埋め尽くし、毎朝掃除だけで3時間かかった。國學院大學の学生時代、神主修行をしていた時のことだ。「おかげで体重が1年で14kg 落ちたよ」。病気平癒で知られる横浜御嶽神社の跡取り息子として生まれ、父の影響で20代から地域活動に取り組んだ。時には神職の袴、時には交通安全協会や消防団の制服を身にまとい、忙しく走ってきた半世紀だった。

中でも力を入れたのは交通事故防止活動。安全教室で行なったダミー人形衝突デモでは、自ら運転手役を買って出たこともある。スピードを落とさぬまま人形に衝突し、あえて危険を体感させる。「子ども達は驚きの声を上げると思うでしょう。でも笑うんだよ」。以後、人形は使わなくなったが、事故の怖さ、命の重さをもっと伝えなければと痛感するのだ。ヘルメット着用啓発に奔走したのは、セーフコミュニティの交通安全対策分科会で座長となってから。「子どもは成長が早いから買い替えが大変だろうけど、自転車死亡事故の約7割が頭部損傷だからね」。啓発活動の甲斐あって自転車事故件数、死亡事故件数は10年間で減少傾向にある。

これらの活動成果を、セーフコミュニティ再認証の審査会では、要人を前に発表し、再認証内定に一役買った。平成31年には交通安全功労者に選ばれ、秋篠宮殿下の前で緑十字金章を受章。晴れ姿を見せたかったのは亡き父だ。父が危篤に陥ったのは十数年前。東京の病院で面会を終えると、とんぼ返りで消防団の訓練の指揮に向かった。「地域に尽くすのが当たり前」が口癖の父なら、「行け」と叱咤すると思ったからだ。「目一杯やりましたよ」。

そんな生き様を神様は見ていたらしい。跡継ぎがおらず「神主の仕事も私の代でおしまい」と諦めていたところ、令和4年に娘が結婚し、跡継ぎを見つけて来たのである。＜善因善果＞。いつかの行いが、神社に春を連れて来た。

命のバトンを繋いでいく

「親への見方が変わる子も多いんです」

Story 11

宮﨑 良子さん
児童虐待予防対策分科会 前座長

北野 優子さん
児童虐待予防対策分科会 現座長

「もう 15 年もやってきたのね」。そう心の中で呟く宮﨑前座長がいた。主任児童委員として取り組んできた「いのちの授業」でのこと。毎年地域の母子を中学校に招き、生徒達に妊婦体験や赤ちゃんとの触れ合いの場を提供してきたが、この日、卒業生がママになって赤ちゃんを連れてきたのだ。生徒達は赤ちゃんを恐々と抱っこしては「命って本当に重たいんだな」と呟き、約 7kg あるジャケットで妊婦体験をしては「お母さんはこんなに大変だったんだ」と肌で知った。「その日は帰った後、親への見方が変わる子も多いんです」。学んでほしいのは、命のバトンが繋がれてきた尊さと感謝の気持ちだ。そんな中、あるママの言葉が忘れられない。「この子が中学生になる頃も、いのちの授業が続いていたらいいな」。

宮﨑の地域活動デビューは PTA 役員。「何でもない地域のおばさんが子ども達に関わることで化学反応が起きれば」と主任児童委員になり、平成 26 年にはセーフコミュニティの児童虐待予防対策分科会座長に就任した。「それまで障害のある方との接点もないまま生きていた」が、ほっとスクールやふれあい運動会での交流を通して全ての人の尊さに気づいたのもこの頃である。以来、より広い視野で子どもの命や虐待防止に向き合い続ける。昨今痛切に感じるのは、子育てに不安を感じる母親が多いこと。「学校が苦手な子どものフリースペースでは“この場所があって救われた”と泣きながら話す母親の話を 2 時間聞いたこともありました」。その温かさをまだ必要とする母子は多いものの、今年、分科会座長を引退し、長年苦楽を共にしてきた北野新座長に引き継いだ。

後任の北野もまた子ども好きで、夕方一人で歩く子を見かけると「大丈夫かな」と目で追う、自称“お節介な人”。「凡事徹底」を信条に子どもの当たり前を大事にし、今後、「いのちの授業」も引っ張っていく。「お願いね」「頑張ります」。命と想いのバトンが、ここでもそっと繋がった。

笑う門には健康来たる

「50代で老人会だなんて嫌だったの（笑）」

Story 12

湯瀬 洋子さん
高齢者安全対策分科会座長

「ヒートショック？ヒートテックじゃないの？」。何度そう言われたか分からない。セーフコミュニティ高齢者安全対策分科会の座長となり、ヒートショックの啓発活動を始めた頃、知名度はその程度だった。ヒートショックとは、急激な温度変化で血圧が大きく変動することをきっかけに起こる健康被害である。栄区シニアクラブ連合会で毎年 1 月には注意を呼びかけるものの、一度だけ身近で起きたことがある。「独居老人宅で、お風呂の電気が朝になっても点いている」と聞き、皆で見に行ったが駄目だった。悔しさと同時に、高齢者は常に危険と隣り合わせであることを痛感した瞬間であった。同時に力を入れるのが転倒予防。「私達の年代は転倒すると骨折しやすく、入院すると寝たきりになってしまうから」。そこで転倒予防体操の普及にも努めた。高齢化が進む栄区で、転倒転落による高齢者の救急搬送や、溺水による死亡者数がほぼ増えていないのは、活動の大きな成果だろう。

老人会のお誘いを受けたのは平成 14 年。当時まだ 50 代で「とても嫌だった（笑）」のを覚えている。それでも「これからはパソコンが出来る人がいないとやっていけない」と懇願されて引き受けた。以来20年以上、栄区の女性部会やシニアクラブ連合会などの要職に名を連ね、地域に貢献する。長く続けてこられた秘訣を聞くと、「周りの人が皆いい人だから」。誰かが何かやりたいと口にすれば全員で動く団結力が自慢だ。「この前も、韓国大使館に招かれてキムチ作りを教わったので、せっかくだからと地域の皆で白菜を持ち寄って講座を開いたのよ」。平成 26 年には鎌倉芸術館でシニアモデルとしてランウェイデビューを果たしたこともある行動派。「一日一笑」が信条である。

地域活動を始める前は病気がちで、大病も幾度も経験した。「今は全然。病気はもう卒業したみたいだって言われるんです」。外に出て皆と活動することで、心も体も健康になれるという範を、身をもって示している。

Story 13

毛利 勝男さん

災害安全対策分科会座長

「何回ハグしたかで、その子は決まる」

地域活動の肝は“愛”

「親父さん、覚えてますか？」。挨拶に来たのは、懐かしい顔だった。かつて保護司として支えた少年が見違えるほど成長し、スーツ姿で婚約者を連れて来たのだ。これほど嬉しい瞬間はない。「あれから学校行ったのか」と問うと、照れくさそうに「一応、東大に」と答え、就職先の名刺を差し出した。定年前から保護司を始め、担当したのは約50人。再犯ゼロが誇りである。「非行に走る子は愛情不足。小さい時に何回ハグしてあげたかでその子は決まるんだよ」。

地域活動でも愛情が鍵だと言う。約 10 年前から始めた「支えあいカード」も地域愛を具現化した一つ。災害時、避難所まで自力で行けるか否かを記入してもらい、回答を踏まえて要援護者の避難訓練を行うのである。「当初は個人情報保護を理由に記入が進まなかったが、東日本大震災を機に防災に対する住民の意識が変わった」。高齢者は勿論、自閉症の子がいる家庭など約 200 人が助けを求めてくれたおかげで、より漏れのない防災体制構築が進んでいる。

地域防災拠点である豊田小学校での拠点長も歴任。「防災訓練では、5年生に水消火器訓練、6 年生には心肺蘇生や AED、1 年生から 4 年生までは備蓄庫の見学とトイレの組み立てをやってもらった。首都直下型地震などが来た時に、率先して心臓マッサージが出来ればいい」。この訓練は平成 30 年度のセーフコミュニティ現地審査の対象にもなり、児童らの頑張りは海外審査員に強い印象を残したのだった。「子ども達は今でも会うと敬礼してくれる。訓練での人員報告を真似しているんだよ」。他にも認知症の方やその家族が交流できる「ひまわりカフェ」や、高齢者が集える「ことぶきサロン」を開設し、やさしく寄り添う街づくりを目指す日々だ。

ただ高齢化が進む今後、町内会運営は難しくなると懸念する。「若い人を引っ張り込むのが一番。中学校や高校に行ってボランティアを呼びかけているところ」。勿論、若手も“愛情”をもって育てていくつもりだ。

Story 14

小田原 俊成さん

自殺予防対策分科会座長

「死にたいとは、生きたいの裏返し」

声なき声に耳を澄ませる

都会の喧騒の中では、耳を澄ましても、聞こえない音がある。声なき声である。横浜市の令和 4 年の自殺者数は年間 506 人。助けも求めぬまま、死を選ぶ人がこれだけの数いるのだ。その声なき声を聞くために、精神科医として 30 年以上向き合ってきた。「自殺に傾く人の多くは精神的問題を抱えており、症状は飲酒や攻撃性などの行動の変化にも表れます。それを理解し、救える命を救うという意味で、精神科医療は外科や癌治療と変わらない」。平成 27 年にセーフコミュニティの自殺予防対策分科会座長に就任したのも、診察室以外で出来ることがあると思ったからだ。

駅前での啓発運動、命の電話、リスク者を支援するゲートキーパー育成。様々な活動に挑んだが、歯がゆさも感じていた。個人情報保護の壁である。「横浜市は個人情報に厳しい自治体。自殺のハイリスク者は自殺未遂の経験がある方ですが、医療機関から情報が明かされず、支援者の手が届きづらいのです」。再認証の審査で、審査員から指摘されたのもこの点だった。そこで自殺ハイリスク者支援検討部会を設置するなど、横の連携強化にも動いたのだった。

また自殺の話を敬遠する風潮も予防を妨げると考える。「私の父は精神科の開業医でしたが、昔は患者さんとの距離が近かった。信頼できる人の前で、死にたいと言うことは、生きたい思いの裏返し。タブーにしてはいけない」。地道な取組みから支援機関へのつなぎ件数が増加するなど、徐々に結果は出ており、「誰もが自分事とすることで自殺の多くは防げる」と強く訴えたい。

好きな言葉は、スティーブ・ジョブズの「Connecting The Dots（点と点を繋ぐ）」。出会った人や学んだことはやがて一つに繋がるという意味だ。「予定調和ではないが、今この患者さんに関われたことには必ず意味があるはず」。休日、心を無にするために挑むという登山も、何かに繋がる大切な「点」なのだろう。「点」を「線」にする旅路の先に、声なき声が報われる明日はきっと来る。

予防を、治療と並ぶ柱に

「予防がなんじゃ、（大切なのは）治療じゃ」。外科医の父にそう言われたのは、予防を中心とする公衆衛生学の研究者になると告げた時だった。幼少期より父の背中を見て育ち、医学に親しむ中、「傷病の中には予防できるものもあるのに研究が進んでいない」と公衆衛生学に関心を持ったのだ。治療こそ本道と考える父に「予防は、治療や緩和と並ぶ柱」と説き、進学したのは東京大学医学部保健学科。以後、研究の道を歩むのである。

栄区のセーフコミュニティ活動には、傷害サーベイランス分科会座長として横浜市立大学教授時代の平成 25 年から参画。日本最大の政令指定都市・横浜市の栄区を、“予防”を通して安全・安心なまちにするという壮大な試みに挑んだ。例えば小学校では、学校におけるヒヤリハットの全数調査をすべく校長に直談判し、シニアクラブではヒートショック防止の注意喚起にと奔走。あらゆる世代に目を配り、リスク分析を行ってきたつもりだった。

だが、気づきと言うにはあまりに重い事実も突きつけられる。統計で判明した、30 代独身女性の自殺率の高さである。「社会的弱者になりやすい高齢者や母子は調査対象にしていたものの、働き盛りの女性は盲点だった」。調べると、生活困窮世帯の子どもは就学や就職の機会も限られ、低収入となって孤立に陥るという“負の連鎖”があり、声なき声が聞こえた気がした。「こうした方々を守れる制度立案のためにも、確かなエビデンスを提示したい。研究の成果は社会に実装されることが大切です」。

「研究成果は、社会に実装されてこそ」

Story 15

田髙 悦子さん

傷害サーベイランス分科会座長

現在は北海道大学に単身赴任中。自他共に認めるワーカホリックの心に常にあるのは、ニューマン卿（きょう）の言葉“生きるとは変化すること、完全とは変化し続けること”だ。「人も地域も不完全を自覚し、良くなろうと変化を繰り返すことが生きる意味かと」。予防という柱を立てると決意し、社会にメスを入れる娘を、誇らしげに見る父の姿が目に浮かぶ。

栄区のセーフコミュニティ活動へのメッセージ

Message

白石　陽子さん

一般社団法人日本セーフコミュニティ推進機構
（公認セーフコミュニティ・セーフスクール支援センター）
代表理事

栄区のセーフコミュニティ（以下、SC）活動のご支援をするようになった時のことは、今でも鮮明に覚えています。当時、すでに SC 活動は始まっていて、活発な活動をご紹介いただきました。SC の特徴は、行政と地域を「つなぐ」こと、地域の問題や取組をみんなで「共有」し、成果を「見える化（可視化）」することですので、栄区がどのように変わっていくかワクワクしました。

栄区の特徴は 2 点あります。一つは、「区」単位で進めている点です。横浜市ではなく栄区が中心となることで、より地域の実情にあった取組を進めることができたと思います。もう一つは、地域のみなさんの SC への熱意です。「栄区をよりよいまちへ」という思いがあったからこそ、認証の際の地域のみなさんの表情はとても晴れやかだったと思います。これからは、新たな目標に向かって SC を通して得たネットワークやノウハウを最大限に活用し、栄区がより安全・安心なまちになることを心からお祈りしています。